

校名：群馬大学教育学部附属中学校

所在地：〒371-0052 群馬県前橋市上沖町6-1-2番地 電話番号：027-231-4651

記載日：平成28年5月16日

記載者：川野 文行

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：



1 概観

昭和24年5月に群馬県の県都前橋に設立された、県内唯一の国立大学法人群馬大学を構成する中学校である。教育学部の附属学校として質の高い教育実習と教育実践研究を使命とするとともに、「共生・創造・健康」を学校教育目標として掲げる、各学年4学級計12学級の中学校である。

2 校風

校風は、すこぶる明朗活発。特に、学友会（生徒会）活動が盛んに行われるなど、生徒の自主的な活動が様々な場面で活発に行われ、明るく朗らかな生徒の表情が印象的である。また、教育研究に根ざした実践指導と教員の情熱により、生徒が目標を高くもって生き生きと学習に取り組むため、学力や人間力の育成でも大きな成果を上げ、県内はもちろん、国際的・全国的に活躍する卒業生を数多く輩出している。

3 教育研究校として

教育実践研究については、毎年開催する公開研究会等を通して、実践的な教育の理論と方法などの研究成果を広く発信することにより、教育研究の幅広い分野で県内の中学校をリードしている。なお、本校教員はすべて県教育委員会との交流人事となっているので、公立学校から転入した教員が教育研究校である本校で教育実践を積み重ね、その実績と経験を生かして転出先の教育行政機関や公立学校で活躍するなど、県内における教員研修機能を高い次元で果たしている。

4 大学・学部との連携

大学・学部との連携については、学部・附属学校共同研究推進センター、子ども総合サポートセンター、教員養成FDセンターなどの組織を大学・学部や他の附属学校とともに設置し、様々な共同研究・子ども支援・教員養成などに積極的に取り組んでいる。

貴校の卒業生の活躍状況について：

本校では、以前、アンケート調査を詳しく行ったことがあるが、その後は、各界で活躍している卒業生についての情報を卒業生やその保護者、教員経験者などから適宜収集して学校が把握している。

具体的には、テレビアナウンサー、カーデザイナー、ピアニスト、歌人、文筆家、茶道家、ゲーム制作会社経営者などの多様な人材を輩出しているほか、県都前橋を中心とする県内で活躍する政治家、企業経営者、医療関係者、教育関係者などを特に多数輩出している。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

1 すべてが県教育委員会との交流人事

本校教員は転入も転出もすべて県教育委員会との交流人事となっている。そして、本校勤務経験者が本校を転出した後、公立学校の管理職・中核教員や県・市町の教育行政の要職で幅広く活躍している。これは、本校で教育研究や学校経営を実践的に積み重ねた人材が、様々な教育分野で強く求められているためであり、本校が県内において教員研修機能を高い次元で果たしてきた成果である。なお、本校勤務経験者の活躍状況については、特に調査を行っていないが、副校長を始めとして本校勤務経験者であれば、誰が県内の公立学校や県・市町の教育委員会のどのポストに就いて活躍しているかは、おおかた把握している。

2 具体的な活躍状況

具体的には、県教育委員会の教育長・部長・教育事務所所長・管理主監や課長を始め、係長・指導主事・管理主事、市・町教育委員会の教育長・部長・課長・係長・指導主事・管理主事などを多数輩出している。また、公立学校の管理職（校長・副校長・教頭）や中核教員をたいへん多く輩出しているだけでなく、県内の校長会や教育研究会等の組織で中核となって活躍する者も多く、本校勤務経験者は県内教育界の幅広い分野・立場で大きな貢献をしている。このような状況が、昭和から現在まで営々と継続されてきている。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

1 教育研究校

教育実践研究については、毎年開催する公開研究会や公開授業・授業研究会等を通して実践的な教育の理論と方法について発信を行うなど、教育研究の幅広い分野で県内の中学校をリードしている。特に、本校の公開研究会では、すべての教科と学校保健についての公開授業や研究発表を毎年行うとともに、道徳・学級活動・総合的な時間についてもニーズに応じて公開授業や研究発表を行うなど、中学校における教育課程のすべてにおいて積極的な取組を行い、県内公立学校のモデルとして地域に大きく貢献している。

教科教育については、実践指導の方向性を示すべく常に中核的な研究内容として位置づけているが、以前から地道に取り組んできた学級活動や道徳の授業に関する日常的な実践システムについても、道徳の特別な教科化などに向けた教育状況の中で興味関心を集め、県内公立学校の校内研修で取り上げたり実際の校務システムとして導入したりする中学校があるなど、本校における様々な研究内容が県内の公立学校のモデルとなり、広く県内の公立学校やその生徒に還元されている。

また、群馬県教育委員会「はばたく群馬の指導プラン」の推進に関わり、県教育委員会義務教育課と共同で指導案形式の開発や授業改善に取り組んだり授業実践の公開を行ったりするなど、今日まで途絶えることなく教育実践研究に取り組んできた本校は、生きる力の育成に向けた県内の研究開発や授業改善に不可欠な存在である。

なお、本校の教員人事はすべて県教育委員会との交流人事で行われているため、人的な交流の中で、本校の教育研究や様々な教育実践が県内の公立学校に影響を与えたり具体的に導入されたりすることがある。現在本県で主流となっている、生徒の主体性を生かした班別活動形式の修学旅行が広まり定着した背景には、各校で参考資料となった本校の指導細案等の存在があると言われている。

2 群馬県教育委員会との連携

群馬県教育委員会では、義務教育段階では、小学校教員と中学校教員の交流人事を積極的に行っていることから、群馬大学教育学部では小学校教員免許と中学校教員免許の両方を学生に取得させることを基本にしている。そのため、本校では教育学部生全員が中学校免許を取得できるよう、多くの教育実習生（3年生）を受け入れている。また、教育実践基礎学習（2年生）にすべての学生を受け入れたり、学部生のインターンシップや院生の課題解決実習等を積極的に受け入れたりしているなど、本校は群馬県教育委員会が教員の人事行政を円滑に行う上でも、不可欠な存在となっている。

また、県教育委員会が実施する初任者研修において、すべての教科で示範授業と授業研究会等を提供するなど、県内初任者が質の高い教育実践について具体的に研修を積む上で、不可欠な存在となっている。

3 県内教育研究団体の事務局校

本県では、教育研究を行う自主的な団体である「群馬県小学校中学校教育研究会」に、県内の公立小中学校のすべての教員（約9,000人）が所属している。そのうち中学校の国語・社会・数学・理科・英語部会の事務局と各部会を統括する親団体事務局が本校に置かれ、本校の教員がその運営や研究の中核を担う事務局員・研究員などを務めるなど、県内全体の教育研究の進展に寄与している。

4 大学・学部との連携

大学・学部との共同研究については、大学教員をトップとして本校教員もメンバーとなる組織「学部・附属学校共同研究センター」が、学部と附属学校が連携して様々な共同研究を推進するセンター機能を果たしている。もとより、本校は、学部から選任された教授が、校長として附属学校の学校運営を統括して方向性を示すことにより様々な教育活動を行っているが、「学部・附属学校共同研究センター」により、本校教員による大学・学部教員との共同研究・研究協力や大学教員による附属学校の授業研究会・公開研究会での指導助言など、学部と本校が連携して行う共同研究が各教科等に渡って積極的に行われている。

本校では、学部教員が特別授業を行ったり専門性を生かして学校行事に参加したりしている。具体的には、平成27年度において、大学の数学講座教員が有理数と無理数について高度な論理的証明法により説明する数学の授業を行うなど、各教科の大学教員が12の特別授業を20日間に渡って実施した。その中で、生徒は高度な内容を分かりやすく教えてくれる大学の先生に感心し、学問の一端に触れることの喜びを感じることで学習意欲を特段に高めていた。また、本校では、全校行事「校内弁論大会」に国語講座教員が審査員として参加して弁論の仕方やその効果について講評指導を行ったり、全校行事「文化祭・合唱コンクール」に音楽講座教員が審査員として参加して合唱の発声やその豊かさについて指導講評を行ったりするなど、学部教員が生徒の指導に大きな教育効果を上げている。

附属学校のFD活用については、大学教員をトップとして本校教員もメンバーとなる組織「教員養成FDセンター」が、附属学校を大学・学部がFDの場として有効活用するためのセンター機能を果たしている。具体的には、平成27年度において、実践的な教育実践に関する座談会「教育サロン」を2回実施した。その中で、新任の学部教員が各附属学校の公開研究会に参加した経験を基にして附属教員等と討議することにより、学部教員の専門的な知見を生かした教育実践に強い意欲をもつことができた。また、「教員養成FDセンター」で学んだ学部教員が、発達段階に沿った生徒理解を深めるために自ら本校で特別

授業を行い、その経験と知見を学部生の指導に生かすなど、教員養成面での成果を上げている。

教育実習については、学部教員を委員長とする教育実習委員会（年間12回実施）の委員として本校副校長が出席する中で、質の高い教育実習を提供する場としての附属学校的位置付けを踏まえた上で、附属学校を十分活用した大学・学部の教育実習の具体的な計画作成に積極的に参画している。具体的には、実地指導講師として本校教員10名程度が1年・2年・3年のすべての学部生に対して、9日間45時間の講義等を行っている。その中で、教育実習の各学年段階の目的に合致した体験を一人一人の学生が行うことにより、質の高い教育実習を提供できていることは学生の事後感想に色濃く表現されている。また、学部生のインターンシップや院生の課題解決実習等も、積極的に受け入れている。なお、実習生の受け入れに協力している県内市町村担当者が一堂に会する実習協議会に副校長と実習担当教員が参加し、本大学の教育実習について具体的に説明したり、市町の教育実習協力校が抱える問題に丁寧に応じたりするなど、本校は大学組織の一員としての役割を果たしている。

5 PTAの防災対策

本校では、遠距離から通学してくる生徒の通学状況をふまえて、防災対策として生徒用防災グッズの備蓄を行っている。これは、東日本大震災の教訓を生かして、防災教育で有名な片田敏孝教授（群馬大学理工学部）の指導のもと、PTA活動の一環として行われている。備蓄については当然災害時に生徒が物品面から自分自身を守るために行っているものだが、入学時にその趣旨を説明し、卒業時に生徒一人一人に防災グッズを返還することで、生徒の防災意識の向上に役立っている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

本校は、これまで築いてきた校風や教育内容から「(自分が)学ぶなら(群大)附属中」「自分の子どもを学ばせるなら附属中」と、多くの子どもやその保護者から高いニーズを集める存在である。

また、これまで述べてきたように、本校は特に群馬県において以下の点で不可欠な存在になっている。

- 1 教育研究校として、県内の教育研究をリード
- 2 教育実習校として、県内を中心とする教育人材を育成
- 3 大学・学部との積極的な連携
- 4 県内における教員研修機能や小中交流の人事行政

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

上述したとおり、本校は、①教育研究をリードする教育研究校、②教育人材を育成する教育実習校、③大学・学部との共同研究、④県教育委員会の教員研修・人事行政の面などで、県内で不可欠な存在であると言える。特に、研究開発校や研究指定校として教育研究を行ったり、教育実習を受け入れたりする学校は公立学校でも多々あるが、創立から現在までその取り組みを継続して常に行っているのは、附属学校以外にはない。それらの取り組みを継続するのは簡単なことでなく、現在の教員やこれまでの教員経験者が熱い思いで築いてきた教育成果が、子どもやその保護者の高いニーズになっていると思われる。そのことを、これからも継続していくことが、附属学校である本校の存在意義であると考えられる。